

第1分科会 「公共図書館における広域連携の可能性」

課題提起 : 平賀研也 (県立長野図書館)

実践報告 : 鈴木康之 (坂城町立図書館)、辻井まどか (茅野市図書館)、宮下裕司 (飯田市立上郷図書館)

進行・記録 : 小澤多美子 (県立長野図書館)

参加者数 : 57名

1 発表の概要

(1) 目的

山間地の多い信州は、地域ごとに独自の文化圏をつくりあげてきた。その中で各地の図書館や公民館が果たしてきた“地域における知の拠点づくり”の役割について改めて考え、今後の広域連携の在り方について議論する機会となることを目指した。

(2) 事例報告

はじめに平賀から課題提起として、これまでの広域連携は資料の相互利用を目的としたシステム統合やデータ共有がメインだったが、社会(デジタル化、人口減少等)や図書館(役割や働き方等)の変化もふまえながら、これからの可能性について考えたいとの話があった。その際に、例として職員研修のあり方やプログラムの提供、人材の継続的な育成や確保などが挙げられた。

続いて、県内3地域の図書館広域ネットワークに携わる3館長から事例発表が行われた。

鈴木康之氏からは、県内の広域ネットワーク草創期に構築された上田地域図書館情報ネットワーク「エコー」について報告があった。構想がスタートして25年になる同システムは、広域連合が主体となり運用しており、実務会議が月に1回開催されている。参加6自治体の合計蔵書数は85万冊にのぼり、利用者からのリクエストは域内で約8割が応えられるほどで、発注情報の共有が可能のため各館において選書の参考としても活用しているとのことである。

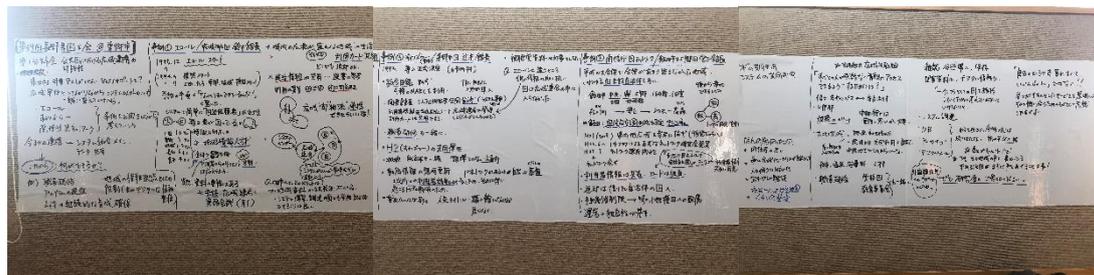
続いて辻井まどか氏からは、諏訪地域図書館情報ネットワーク「すわズラー」について報告があった。同システムは、4種のMARCを利用しながら運用する総合目録形式のものであり、利用者情報については各館が管理しながら、利用カードを共用できるしくみとなっている。また、利用者の域内移動が多い地域事情に合わせ、動態情報を随時更新にするといった改善も行ってきたとの話があった。そのほか、広域圏として職員研修も合同で行っているとのことである。

最後に宮下裕司氏から「南信州図書館ネットワーク」を軸にした下伊那地域の図書館事情について報告があった。当該地域は平成の大合併であり合併が進まなかった地域であり、いわゆる公立図書館未設置自治体が多い。その中において中核的な自治体である飯田市が同システムを構築し、周辺自治体図書館の参加は南信州定住自立圏形成の追加協定を締結する形をとっている。県内では一番新しい広域ネットワークであるため、他地域事例を参考にした結果、利用者情報は共有しながらも、カードは各館独自のものを利用するという形式にしたとのことである。

(4) まとめ

「すべての人が制約なく情報にアクセスできるようにするために何をすべきか」という視点から考えると、長野県における公共図書館の広域連携はもっと多様な取り組みを広げていく必要がある。それは、これまでの「紙の本を共有する仕組み」だけにとどまらず、商用データベース契約、システム調達、アーカイブの構築といったように、デジタル情報にきちんと向き合い、それを活用できる環境を実現するための共同の形である。そのためには市町村立図書館は積極的に声をあげ、提案を出していくこと、県立図書館はそれをうけて調整・

推進役としての役割を担うことが大切であるとし、これからの「信州の公共図書館」における連携の可能性を共に考え、模索していこうと締めくくられた。



第2分科会 分科会テーマ

「“みんなの学校図書館”のつくりかた ～未来の学びを体験、発見！～」

コーディネーター：朝倉久美（県立長野図書館）

篠田尚利（長野県教育委員会 文化財・生涯学習課）

1 発表の概要

5年後、10年後に学校図書館が果たすべき役割を考えるには、教育関係者（学校・図書館・教育委員会）が、いかに子どもたちの将来的な学びの姿を思い描けるかにかかっている。県立長野図書館は、公共図書館と学校図書館における連携のあり方を探る中で、実際に学校現場で展開できるプログラムをともに考える機会にしたいと考え、この分科会を設定した。そのため、講演会や実践発表ではなく、参加者が能動的に加わることができるワークショップ形式であること、分科会運営者は講師ではなく、あくまでもコーディネーターという立場であることにこだわった。

2 討議の概要

- (1) ガイダンス「知ることを楽しむ ～県立長野図書館の児童向けリテラシープログラム～」
- (2) ワークショップ「総合百科事典ポプラディアを活用した企画書作成（海の家を経営する）」
- (3) グループ座談会「子どもたちのよりよい学びのために、誰と、何ができる？」

県立長野図書館の児童室運営コンセプト「体験、発見、やってみ！」に基づき、小学4年生の学校図書館活用授業をイメージして開発したワーク（協働学習、文献調査、プレゼンの総合力向上を目的としたもの）を全員で試した。子ども役の参加者は、海の生き物になりきって百科事典で自らの特性を調べ、そこで得た情報を生かして海の家を経営するための企画書を作成する。教職員役は学校図書館での授業導入を想定し、ワークの様子を見ながら支援方法を研究する。終了後はグループ形式の座談会を設け、教育委員会職員の篠田主査から、理解者や協力者を増やすために必要な「説得力を持たせる図書館活動」についてのレクチャーを行った。



3 まとめ

分科会には学校図書館関係者のみならず、公共図書館職員や一般の方からも多くの参加があり、立場や経験を越えた学びの機会となった。当日の感想には「楽しかった」「ワクワクした」などの前向きな言葉が並ぶとともに、この場で試したワークを授業やイベントで導入するためのアレンジ方法なども書かれており、参加者それぞれが「未来の図書館」の姿をイメージできたように感じられる。学校を含む小規模館は、人手がない、お金がない、時間がないなどの理由で新たな実践の導入に二の足を踏みがちである。“誰のために、なんのために、図書館はあるのか”に常に立ち返るためにも、今後も学校と公共の連携をテーマにした分科会を継続的に開催していきたい。



第3分科会記録 13:10～15:10

記録者：松本市立女鳥羽中学校 宮坂豪人

司会者：三崎眞一先生（大町市立仁科台中学校）

助言者：広川芳守先生（長野市立清野小学校）

世話係：小林政徳先生（東御市立和小学校）

テーマ いきいきとした学校図書館を創造する司書教諭の役割
～学校司書との連携のあり方～

○鎌田中学校（発表者 笠原佳子先生 井原智美先生）

13:07 レポートに沿って発表

13:23 質疑応答

Q：司書教諭と学校司書の打ち合わせはいつ行っているか？

A：司書教諭が図書館に遊びに行く（出向く）。決まった時間は設けていない。

Q：でないと時間がとれない。他の中学校はどうか。

A：なし

Q：夏休みの開館が学校司書の勤務の関係でできない。司書教諭も忙しい。どうやっているか？

Q：図書館便りの発行の度合いはどのくらいか？編集委員会との会議はどのようにやっているのか？

A：夏休み中に1回は開館するようにしている。司書の勤務は難しいところもあるが、生徒が来そうな日、例えば部活の行き帰りの昼などを狙って開館するようにしている。冷房設備が入っていて、来館に効果がある。

A：図書館便りの発行は、生徒から言ってきた。形式はクラス掲示にしてあり、家庭配布はしていない。その分、実名が出せるので、貸出冊数ランキングなど、生徒が励みにしてくれる。

会議の時間をとるのは難しい。図書委員が、当番活動のときなどに相談して、生徒が動いて作っている。職員は間違いのないように心がけている。編集委員は、レイアウトや作り方のバックアップをしてくれている。

○城南中学校（発表者 岩上渚先生 川崎絢先生）

13:32 レポートに沿って発表

13:52 質疑応答

Q：ビブリオバトルのチャンプ本は何だったか？発表者や、やったことによる他の生徒達の反応はどうか？

A：チャンプ本は、20代の男性教諭による『容疑者Xの献身』だった。生徒によるチャンプ本は、『永遠の0』だった。

発表した生徒は、終わってほっとしたと言っていた。3分で言うことは難しいと思っていたが、市立図書館での発表と学校での2回やったことで、委員長などは3分きっかりでできるようになった。3年生の発表生徒の4人は、市立図書館で1回やった後に、できそうだと感じたようだ。

図書委員会での反省では、来年度もやってほしい、クラスでやりたい、学年でやりたい、というような声もあった。一方、ビブリオバトルを、今回まで未経験だった生徒達からは、聞き方がわからないところがあり、いろいろ聞いてよかったという感想もあったが、長かったという感想もあった。

Q：小学校の図書館では、どんな本を入れればいいのか、悩むところがある。雑誌を入れたということだが、どんな雑誌か？

A：部活動に関わる雑誌の8誌はすでに入っていた。ただ、今まではバックナンバーがきれいなままで貸し出しなどされず残っていた。もったいないと思い、貸し出し対象にした。家でゆっくり読めるのがよいと思う。

○ポップ作り（指導者 小池智恵先生 長野市立裾花中学校）

14:10～15:13

ポップの作り方の説明、参加者による実作、お互いの作品を鑑賞

○まとめ（小林政徳先生 広川先生退席のため代理）

- ・生徒が図書館に足を運ぶこと、生徒を本好きにすることは、先生方のいろいろなアイディアや仕掛けがあって実現することだとあらためて感じた。
- ・図書館便りや雑誌の貸し出し、ビブリオバトルなどの企画が、生徒と先生方のつながりから生まれてくるということがすばらしかった。
- ・ポップ制作では、美しい文字や上手な絵、惹きつける内容のものが多く、こうしたものに触れられる生徒たちは幸せだと感じた。

ここからはじめる学校司書の働き方改革

第4分科会 ～だいたいじょうぶ びりじょうぶ～

No. 1

DATE R1.11.9

レポート発表 I

学校司書1年生。困り感からうまれる。学校司書の働き方改革
～全職員を巻き込んだ図書館運営を目指して～

発表者 東御市立東部中学校
児玉晶子 池田健一

質問 市立図書館との連携の機会があるのか

A. : 様々な面で相談にのっていて、司書に使用する本も数十冊かして下さる。

レポート II

「ここからはじめる学校司書の働き方改革」
～だいたいじょうぶ びりじょうぶ～

発表者 伊那市立西箕輪小学校
宮下麻子、降藤美来

Q 担任をもっている司書教諭、どう共同していらっしゃるのか。

A 百せんでのやり取り。おかげで仕事につかえる。

A なるべく担任に声をかけるように心がけている。Tのコミュニケーションの大切さがある。

Q (11月) ビデオバトルについて

A. 司書会で紹介されたので
※ライブラリーフェスの紹介

事例紹介①

新聞記事活用企画展示で新鮮な情報発信を

発表者 長野市立櫻ヶ岡中学校
山崎裕子

Q POPはどうつけたのか

A ホットプレートにはエソを立てる
本に直接はる場合はマスを使う

Q 新聞の切り取り 取りかえるタイミングは?

A 理想は3日に1度 長くて2週間
著作権料 授業はOKだが 掲示や配布は有料

事例紹介②

「生徒会企画としての「ミニビブリオバトル」実践について
～図書館の敷居を下げ、子どもたちと本の距離を近づけるために～

池田町立高瀬中 小笠原さおり

Q いつの時間をとっているのか

A 特に設けていない 1-2ヶ月前にバトラーを募集する
司書が 役押し

バトラーがそろったら バトラーの説明会を南く

A 生徒集会 オープンエンドで 授業が終わった後

Q 図書委の活動 企画にするのが大変か、中、下4が立上げて
いるのか

A 去年5月目にして やっと提案できた企画

Q 自分も是非やってみたい

A 子どもを巻き込む。やる気にさせる。

テーブルごと意見交換

今困っていること → 課題解決
ぶせんで出し合う

講師のご指導

- 先生方の日々の苦勞が本当によくわかる。
- 司書と教諭。安心して話しかけてほしい。
- 風越学園

- ・新学習指導要領 の実施 の中 で、必要 と される の は 本、本 の 世界
- ・想像力 の 欠如。
- ・文学、語学 学習 図書館 の 役割 情報、学習 セクター の 役割 期待 されて いる。

第5分科会 分科会テーマ「図書館の管理・運営のあり方」

助言者:岡田 泰輔 先生(長野県総合教育センター教職教育部 専門主事)

司会者:武田 道子 先生(上田市丸子北中学校)

発表者:小口恵美子 先生(塩尻市学校図書館委員会代表 塩尻市立広陵中学校)

樋口 幸恵 先生(塩尻市立塩尻西小学校)

古澤万喜美 先生(安曇野市立三郷中学校 司書教諭)

1 発表の概要

① 塩尻市学校図書館委員会 小口恵美子先生 発表

「図書館の管理・運営のあり方 ～塩尻市図書館との連携とすぐにできるアイデア30～」

塩尻市の公共図書館と学校図書館の連携。塩尻市学校図書館委員会は学校図書館の運営に関わる協議を年 6 回開催し学校図書館の機能向上に努めている。団体貸出、本に関わる出張授業、杉山亮さんの巡回ものがたりライブ、市立図書館職員による学校図書館のサポート(本の選定、抜き出し、情報の共有)、分館との連携、視察研修、中学生向けの図書館便り「ムチュータイムス」の発行、学校間支援として除籍本選定・廃棄本の処理・新着図書受け入れ作業、蔵書点検手伝いなど、すぐに使えるアイデア 30 例:ブックボタン等

② 安曇野市立三郷中学校 古澤万喜美先生

安曇野市立三郷中学校 全校 533 名 図書館の場所がわかりにくく利用しにくい立地

「OPEN」「CLOSE」パネルをどの教室からも見られるよう工夫、返却のブックトラックに司書が意図的に書架から抜き出して置く、読書週間の企画として「シークレット本」「図書館クイズ」「本のポップコンテスト」等

2 討議の概要 9グループに分かれて討議後、各グループの発表

〈討議1〉公共図書館と学校図書館の連携、学校図書館同士の連携、学校図書館で使えるアイデア

- ・公共図書館と学校図書館の連携は今後自治体にも働きかけ充実させたい、塩尻市の取り組みは先駆的
学校間の連携なく一人職場の学校図書館が多い、横のつながりや情報交換の必要性。
- ・読み聞かせボランティア、朝の集会でのブラックパネルシアター実演、世界遺産のパズル、図書館すごろく、読書チャレンジ「名人カード」「達人カード」等、コラボ給食、福袋 POP、様々なアイデアの紹介。

〈討議2〉本のタイトル(書名)＝個人情報という課題に対する対策

- ・本のタイトルだけでなく貸出冊数も個人情報。代本板は使わない。予約本や督促状の扱いは司書が行う。学校図書館では「個人情報」という意識が薄いので今後具体的な対策が必要。

〈討議3〉中学2・3年生がもっと図書館を利用するようになるための対策

- ・雑誌、新聞、マンガ等子ども達の興味あるものを置く。ブックポストを様々な場所に設置する。入試対策の一環として新書の紹介。図書館は静かに本を読む場所という概念にとらわれず、話し合う場所、くつろげる場所、知識や情報を得る場所としての図書館にする。

3 まとめ(助言者の指導を含む)

- ・次期学習指導要領では「何を知っているか・何を学ぶか」というこれまでの知識中心の教育から「何ができるようになるか」そのために「どのように学ぶか」という資質能力の育成を中心とした教育へと変化。
学校図書館は「学校教育において欠くことのできない基礎的な設備」とされ「読書センター」「学習センター」「情報センター」の3つのセンター機能が明記されている。
- ・塩尻市では学校図書館委員会が組織され年 6 回も協議。人的・物的体制の確保、教育活動の質を向上させ学習の効果の最大化を図る」ことにつながる。
- ・三郷中学校でも公共図書館との連携、利用者視点からの図書館内の動線の工夫、貸出回数の少ない図書を手に取る工夫が貸出冊数の増加につながっている。借りた本の題名＝個人情報だが個人の読書傾向を知り本を薦めていくことにつながる。「情報処理能力」の育成にも使える。
- ・「視覚障害者等の読書環境の整備に関する法律(読書バリアフリー法)が今年 6 月に成立、施行。
学校図書館の担う役割がますます大きい。学校司書と担任・教科担任をつなぐ司書教諭、「チーム学校図書館」を校長先生のリーダーシップの下、各立場で連携・協力していきたい。

第6分科会 「学習センターとしての機能を推進するための取り組み」

助言者 久保貴史（北信教育事務所）

司会者 宮島卓朗（屋代高校附属中学校）

発表者 玉井君枝（飯田市立竜丘小学校） 黒野しのぶ（飯田市立竜丘小学校）

小島夕貴（須坂市立常盤中学校）

記録者 中村仁志（中野小学校）

1 発表の概要

(1) 「図書館を活用した学び」～司書教諭と司書との連携～（竜丘小学校・玉井君枝、黒野しのぶ）

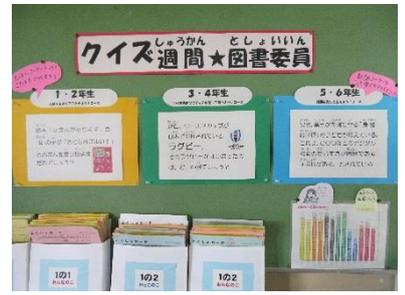
学習センターとしての工夫として、「・わかりやすいサイン・読みたい、知りたいに答える・来館する楽しみのある図書館」を大切にしている。職員会時の一人一人の発表時間を使って新刊本の紹介をする、司書教諭と司書がやるべきことを明確に分けて連携している。情報・メディアを活用する学び方の指導体系表（全国図書館協議会）を参考にして、低・中学年に指導をしている。その一方で司書教諭が学級担任との兼任であるため、他クラスの授業に参加するために自分のクラスの自習の準備をするなどの苦労があることもお話していただいた。



ひらがなとカタカナで書いて



分類の学習時に掲示した資料



ク

イズ週間の取り組み

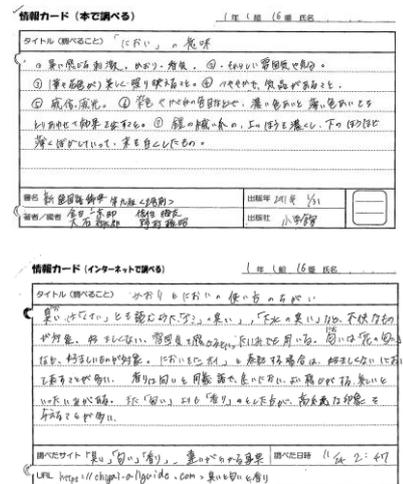
あるサイン（わかりやすいサイン）

（知りたい、に答える）

（楽しみのある図書館）

(2) 学習センターとしての機能の推進（常盤中学校・小島夕貴）

平成28年度から全ての学年で「ビブリオバトル」（国語の学習）の授業を行っている。図書館に行く時間を作ることができた生徒がいたこと、友達の記事を聞いてさまざまなジャンルの本を読むことができた生徒がいたことなどの成果があった。また、「調べたことを報告しよう」（国語・1年）の授業では、「情報カード」を使ったことで、レポートを書く時に情報を整理しながらまとめる事ができた。情報を正しく読み取って思考する力を伸ばすことが課題である。「学習センター」としての機能を高めるためには、新たな資料を計画的に整備すること、全職員で「図書館づくり」に取り組むことが大切である。



情報カード（上、本用）

（下、ネット用）

2 討議の概要

(1) 司書からのアプローチが多く、教師からのアプローチが少ない。

(2) 司書からみると、担任の先生方が忙しそうで声をかけていいか迷う。

(3) 学校職員の図書館に対する認識・意識が低い。（あとまわし）

(4) タイムリーな話題（令和から万葉集へ等）を逃さずに指導へつなげる。

3 まとめ

(1) H16 文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」第2「国語力を身につけるための読書活動のあり方」2 学校における読書活動推進の具体的な取組 より

・図書の整備・学校図書館に「人」がいること・すべての教科で「読書活動」に取り組む

* 15年前の答申内容が現在に通用することに図書館教育の現状・課題が現われているのではないか。

第7分科会 分科会テーマ「情報センターとしての機能を推進するための取組」

助言者：目黒 哲朗指導主事（東信教育事務所）司会者：越智 寿美（長野市立芹田小学校）

発表者：三井 純世（木祖村立木祖小学校）、鈴木 知恵（佐久市立望月中学校）

1 発表の概要

（1）木祖小学校 実践報告「木祖村を紹介するPRチラシを作成するために（4学年）」

4学年担任より、「資料を用意してもらえないか」という依頼

→司書より「学校図書館内の郷土資料は大人向けで、小学生が調べ学習として使用するのは難しい。情報がまとまっている村の観光パンフレット等を合わせて活用したらどうか。」と提案。

〈司書としての取組〉

- ・観光パンフレットが一人ずつ行きわたるよう、全員分を役場の商工観光課と観光協会に依頼。
- ・使用目的（善光寺門前での配付）も明記し、了解を得る。

〈まとめ〉

- ・最新の情報を得るためには、パンフレット・リーフレット・役所の統計資料も有効。
- ・必要な情報を取捨選択しその情報を使って発信・表現する力をつけられる図書館を目指したい。

（2）望月中学校 実践報告「生徒の情報の収集・選択・活用能力の育成を目指した学習支援」

【1年生】「図書館利用のオリエンテーション」

【3年生】「福祉体験学習に向けた事前学習」

- ①各施設に合った紙芝居を生徒が選んで借りられるよう、30セット市立図書館で借りた。
- ②本の探し方等を生徒へアドバイスした。

〈課題〉体を動かしながら歌える本、年配の方との会話術が載っている本が必要だった。

【2年生】「八ヶ岳登山に向けた事前学習」

- ①福祉体験学習の際の資料不足を反省し、市立図書館と連携して本を用意。
- ②教師と事前に調べるテーマを打ち合わせ。
- ③図書館内に、テーマ別の本とリストの展示。

〈課題とその対応〉必要な資料を自力で探せない生徒が多かったため、1単元をもらい、目次や索引の使い方、著作権について説明し、各自で調べ学習をしてもらった。

〈まとめ・課題〉

以前は事前に学校司書と教師が打ち合わせをする機会が少なかった。しかし、図書館担当の先生や校長先生が、図書館を情報センターとして活用していくよう、周りの教師に呼び掛けてくれた。今後も生徒・先生が活用してくれるような資料を用意していきたい。

2 討議の概要

- ①・年間計画にどの単元で図書館を利用するかを組み込むと学校司書が活動しやすい。
 - ・母語が日本語ではない子どもに向けた資料も増やしていく必要がある。
 - ・資料リストは教師に渡すだけでなく図書館にも掲示しておくことで子どもたちの目に入る。
- ②・ICT環境が整っていない学校図書館も多い。ICT環境の整備が必要。
 - ・最新の資料を用意するほか、DVD付きの本を図書館で提供したらどうか。
- ③・学校司書と教師が、お互いの状況を理解し、連携する必要がある。
 - ・資料等の充実を図るため、市内の図書館との連携を図っていく。

3 まとめ（助言者の指導を含む）

- ・学校図書館は計画的に活用していくことが大切である。
- ・小1～中1のどの学年においても、情報を活用能力を育成するために、学校図書館は大切な場所。中2・3年はより広い情報活用能力の育成が求められる。
- ・必要な資料を探す方法は、定期的に子どもたちに指導する必要がある。
- ・休み時間等を活用し、学校司書の先生方には、教師との連携をとってほしい。
- ・望月中「目次を確認しなかった生徒の姿」→子どもの姿から図書館の在り方を語っていきたい。

第8分科会 分科会テーマ「地域とつながる高校図書館」

助言者：なし 司会者：小田聖魅（上田高校）

発表者：小林國弘（白馬高校）(1) 羽田美乃里（上田染谷丘高校）(2)

1 発表の概要

(1)地域と協働した調べ学習 ～白馬のガイドブックを作ろう～

他校の論文集などを見て参考文献記録の必要性を感じ、3年生に参考文献記録・著作権・多角的な思考と視点が確実にできるような授業をと考えた。これらの目的のために、地域と協働（外部講師）する地域ガイドブックづくりの授業を国語表現で行った。学校司書と打ち合わせをし、資料準備、参考文献・著作権の講義、レファレンスを司書が担当。また、白馬村役場白馬高校支援係と相談し、社会人講師（外部講師）を派遣してもらい、外部講師には調べ学習の支援とともに地域住民や社会人としての視点から生徒への支援をお願いした。授業はグループワークで行い、司書・外部講師と協働しながら、発表まで含めて8時間で行った。授業の感想として①生徒は意欲的②時間的余裕がなく資料が十分とは言い切れなかった③現地見学できなかった④外部講師の積極的関わりが有効だったなどがあげられる。課題として①参考文献の継続的な指導②公共図書館との連携③外部講師の必要性④現地調査の有効性などがあげられた。

(2)図書委員会活動の取り組み ～まちのブックマップ作成を中心に～

図書委員会活動全体の取り組みについて説明があったあと、図書委員会で上田市内の「ブックマップ」作成にどう取り組んだかの報告があった。①企画の立ち上げ②「NABO」「コトバヤ」というブックカフェへの取材③上田市内の本屋さんへのアンケート（10代へのオススメ本と読書についてのメッセージ）④文化祭前にブックマップを完成、配布、掲示（校内だけでなく、校外でも配布）⑤書ききれなかった取材の中身を図書館報へという流れで「ブックマップ」を作成した。

図書委員会活動全体や文化祭企画によつての効果としてあげられたのは、主体的にやりたいことをやる楽しさ・実践的な課題解決の場となった・生徒自身の企画が実現する体験・仲間と作り上げる達成感・横のつながりや時間の共有がはかれたことなどである。またこれからの課題として、図書館での調査とフィールドワークとの関連も考えていくとよいのではという点があげられた。

2 討議の概要

- ・「参考文献」については、随時言っていけないと難しい。ただ、授業で経験を積むうちに最初から説明しなくても分かっている部分はあると感じている。継続的に指導していくべき。
- ・社会人の方たちにも学校や授業に関わりたいと思っている方が多い。社会人講師の活用は有用。
- ・論文関係の授業は全部図書館で行っている。タブレットは図書館に配置してもらっている（白馬高校）ので、随時授業で使っている。
- ・外に出る経験を通して、生徒が自分のこれからの学びを見つけることができ、キャリア教育にもつながったと感じている。

3 まとめ

- ・今年度より穂高商業の生徒たちと連携してYAの棚づくりをしている。まだ手探りの状態だが、実際に書店を見学して棚づくりを学んだりしている。高校生の言葉や発想にはっとさせられることも多い。生徒主体で動くことの大切さをあらためて考えさせられる分科会だった。（安曇野市立図書館の方より）
- ・地域の人が学校を知る機会があるというのは大切。
- ・学校図書館が生徒の地域での活動にどこまで関わるのか、を考えていきたい。

第9分科会

大学図書館の広報活動～図書館広報誌と SNS の活用～

発表者：佐藤 有妃（佐久大学図書館）

1 発表の概要

分科会開催に先駆けて、長野県図書館協会大学専門図書館部会の加盟館 15 館を対象に、「図書館の広報活動に関するアンケート調査」が行われており、アンケート結果の発表が行われた。報告の要旨は下記のとおりである。

広報誌及び各種 SNS での広報活動を行っている図書館は 5 館、行っていない図書館は 10 館という結果であった。行っていない図書館では、図書館 HP の「お知らせ欄」や掲示物での広報を行っていると推測される。図書館での広報というと、かつては紙媒体の広報誌が中心となっていたが、制作コストや制作担当者の負担があるため発行を中止して、SNS での情報発信に切り替える傾向がある。「今後やりたい広報」では SNS のツイッターが最も多く挙げられた。

2 討議の概要

グループワークとして、「広報誌発行のメリットおよびデメリット」および「図書館だよりの発行案」をテーマに討議を行った。討議後に各グループの代表者が発表を行ったが、多角的な分析や斬新なアイデアが見られ、実りの多い時間となった。紙で発行する広報誌からペーパーレス広報へと移行する傾向にあるが、そのような状況で、印刷物を使用した広報活動について向き合う良い機会となった。



下記に、発表内容を抜粋して記載する。

〈広報誌発行のメリット〉

- ・図書館利用者に原稿をご執筆いただいたり、作成に携わっていただくことで、図書館職員と利用者とのコミュニケーションが生まれる。
- ・的を絞ったテーマの下で作成できる。

〈広報誌の発行案〉

- ・QR コードを掲載して、図書館 HP や SNS へ繋げる工夫をする。
- ・初見で手にとってもらえるよう、図書館のオリジナルキャラクターを紙面に登場させる。

3 まとめ

前半の発表では、県内の大学図書館での広報活動の状況を共有することができ、各機関で今後の広報活動を検討していく上で大変参考となる調査報告であった。また、後半のグループワークでは、十分な時間が確保され、有意義な討議及び交流の時間となった。

広報活動を行う際に大切なのは、「誰に何を伝えたいか」を検討した上で適した媒体を選択することだと、参加者全員で再確認できた。今後は、「図書館利用者につながる広報」をテーマに取り組むことが重要となってくる。

第 10 分科会 分科会テーマ「公共図書館から保育園・幼稚園への読書支援」

助言者：氏名(所属)月岡栄子(くるみ幼稚園)、小林己和子(和保育園)

司会者：氏名(所属)伊藤理恵(読書アドバイザー)

発表者：氏名(所属)神農史織(東御市図書館)氏名(所属)坂口真理子(東御市図書館)

1 発表の概要

事例発表は「配本事業」と「保育園年長児おはなし会」の2事例が発表されました。

「配本事業」については、20年ほど前に健診時の読み聞かせ活動から端を発し、その後当時の保育園長への打診を経て東部町(当時)内の保育園へ配本を開始しました。当初は図書館で選書をした絵本を各園に配本後、1か月毎に巡回する方式でしたが、巡回の回数や紙芝居を配本に含めるなどの改善を図りつつ事業を継続しました。現在では、園からの配本依頼書による申込制(園の要望と図書館の選書を組み合わせている)とし、本の配本を保育担当部局が実施するなど、図書館部局の負担軽減にも配慮した形の事業となっています。配本事業にあたっては、①貸出期間、冊数、配本方法②園から家庭への貸し出しの許可の2点の取り決めが必要な点です。また、絵本等の選書について、ストーリーと絵の調和など気を付ける点を挙げ、具体的な配本事業の流れを一連の作業が紹介されました。配本事業の良い点として、園の本で補えない部分をサポートする点、保護者を含めた家庭に本に触れる機会を持つ点、園の実情に応じた本を提供する資料的な役割を果たすことができる点などが挙げられます。

「保育園年長児お話し会」については、本を大切にすることの実感や小学校でも多くの本を読んでほしいことなどを目的として、年長児のお昼寝が無い例年1月頃に実施しています。実際のお話し会の実演を通し、本を大切にすることを年長児にすることや、“本の誕生日”は出版日と蔵書日の2つあることなど園児に対する取組を実感しました。お話し会によって、図書館職員も子どもの表情や声を直接聞くことができることができる実感が発表されました。

2つの事例の共通の課題として、園児への本に親しむ取組みは重要だが、保護者への取組みが今後の課題との考えが示されました。保護者が本好き、図書館好きにならないと、小さい子供は自分では本や図書館に足を向けられません。今後も保育園や図書館、子どもと保護者とのより良いつながりを常に模索していくことが重要であると感じられました。

2 討議の概要

助言者より園の状況報告等を頂きながら、意見交換を行いました。月岡先生(くるみ幼稚園)からは、全園児に本を購入(月1冊定期購読)し、自分の名前を書いたその本を1か月間読み続ける活動を20年以上継続していることや、保護者にも読み聞かせ活動に先生代わりに参加してもらうこと、又好きな本の内容をミュージカル風にアレンジし、体で表現している事例発表がありました。また、保護者に対しても読み聞かせを体験(先生が保護者へ読み聞かせをする)してもらい、実感してもらうことを実施しています。親から受けた体験が子に伝わり、子どもは親から受けた体験を将来自分の子どもに伝えることにつながるということです。

小林先生(和保育園)からは、保育指針が変わったことにより、子どもが好きな時に好きなだけ本が読める環境を作っている事例発表がありました。参加保育(保護者が先生となって保育に参加すること)によって子どもへの読み聞かせを体験してもらうなど、保護者への取り組みも進んでいます。読み聞かせの効果として、愛着形成として非常に効果を実感しており、トラブルやイライラの子どもが、感情表現が安定してきていることが紹介されました。

参加者からは、この分科会で実践的な配本事業や読み聞かせの活動を研修できたので、それぞれの場所で生かしていきたいなどの感想が寄せられました。

3 まとめ(助言者の指導を含む)

「本好きな子どもを育てる」ことが参集者の共通の目標であり、本分科会で得た「思い」を今後のそれぞれの分野の活動に反映させて、皆で力を合わせ今後も取り組みを深めていきたいと思いました。

第 11 分科会 テーマ 「おはなしの不思議な世界を体験しよう」

～図書館との連携とボランティアグループの個性を生かして～おはなし子ども会の実演
～子育て世代の絵本離れ、おはなし離れを改善するためにおはなしボランティアができること～

助言者：氏名(所属) 飯島 美鈴(紙芝居のくりくり矢) 宮嶋 千春(おはなしたまご)

司会者：氏名(所属) 飯島 貞夫(紙芝居のくりくり矢)

発表者：氏名(所属) 上原 泉(おはなしはらっぱ)

実演者：おはなしはらっぱ：小川 竹子・宇野 みつ子・長澤 郁子・柳沢 美恵子・青山 寛子・田口 恵子

記録者：氏名(所属) 依田 なお子(東御市立図書館)

1 発表の概要

①東御市おはなしボランティア「おはなしはらっぱ」の誕生から今日までのあゆみについて、プロジェクターを使用し紹介がありました。図書館主催の絵本講座を受講された後、有志が集まり 2005 年に発足され、現在、5 団体あるおはなしボランティアとのローテーションで、毎月第 3 土曜日におはなし会を行っている。赤ちゃんから大人まで、出入自由、見る姿勢も自由、興味のあるものを観て貰いたいと、絵本だけではなく、紙芝居、かたり、ペープサート、しかけ絵本、うたあそび、絵本の紹介など様々なものを取り入れ、約 1 時間の会を自分たちも楽しみながら行っている。毎回、絵本の登場人物ごとに読み手を変えたり、親子で手遊びやハーモニカに合わせて歌を唄うこともある。

「おはなしはらっぱ」の名前は、「どこまでも広がる壮大なはらっぱの様に、おはなしやものがたりのイメージを膨らませて、楽しんでもらいたい」と言う思いが込められている。ネット社会の子どもたちに、ご両親や祖父母など家族やボランティアの“生の声”をたくさん聴いて欲しいと、思いを込めている。

②実演プログラム：手遊び・3 匹のこぶた（人形劇）・どうぶつサーカス（絵本）・大きなかぶ（エプロンシアター）・おむかえだあれ（紙芝居）・どうぞのいす（大型絵本）・どんぐりころころ（ハーモニカ伴奏のもと、歌いながら手遊び）約 30 分、観衆参加型の実演をおこなった。

2 討議の概要

「子育て世代の絵本離れ、おはなし離れを改善するために、おはなしボランティアができること」について、5 グループに分かれ、約 1 時間の討議。各々の思いや意見を自由に模造紙にまとめ、その後、全体で各グループ代表による発表がありました。

発表内容は、「一番大事なことは、読み手が好きなものを楽しんで読むこと。時間と心の余裕が必要。」「子育て世代の絵本離れについて、根本に、親や家族が子どもに読み聞かせをしている事がベースとして必要。それがないと、読み聞かせの会などに来てくれることは厳しいのではないか。」「親も子どもも忙しいのが現実だが、“本は心の栄養”なのでボランティアと連携を取って、図書館などから大事な一冊を探してほしい。」「6 歳までの就学前に家で本を読んで貰っていた子どもは、小学校の学校図書で読みたい本がすぐ見つかる。読書力があるようだ。」「ある市では、朝読書をしている学校がある。生徒と先生、皆で、運動会や遠足の時も行っている。それにより授業が進め易く、読解力が付き、語彙も学習力も増える。読書は必要だと改めて思う。市へ提案していくことも考えさせられた。」「ボランティアは女性が多いが、男性も参加して欲しい。味があっという間にあるものがある。」

また実演を観て、「どうぶつサーカスでの、観衆を巻き込みながら話が進んでいく感じが凄くよかった。」「普通の絵本でも観衆参加型で、ハーモニカの音が入りわくわくした。手遊びをもって帰ってやりたい。」等の意見が出た。

3 まとめ(助言者の指導を含む)

ボランティア活動では、忙しい中ではあるが、心の余裕が大事であり、また、自身も楽しむことが大切である。子どもたちに本を読みきかせる機会が増えるよう、セカンドブックや朝読書など、図書館や市町村と連携を取り、提案、要望などお願いすることも必要である。

第12分科会 分科会テーマ「地域情報と人を結び直し、資産を創り・活用する。」

助言者/司会者/発表者:氏名(所属) 諸田和幸 (高遠ぶらり制作委員会)

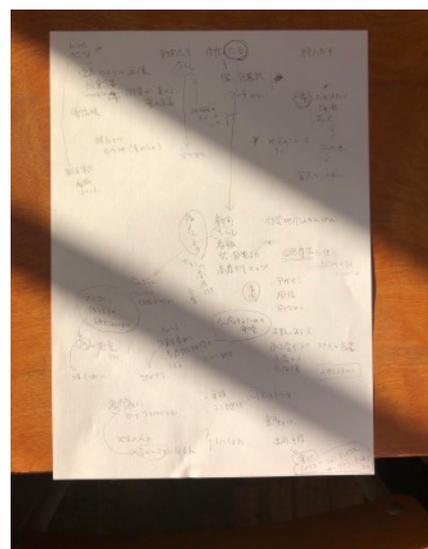
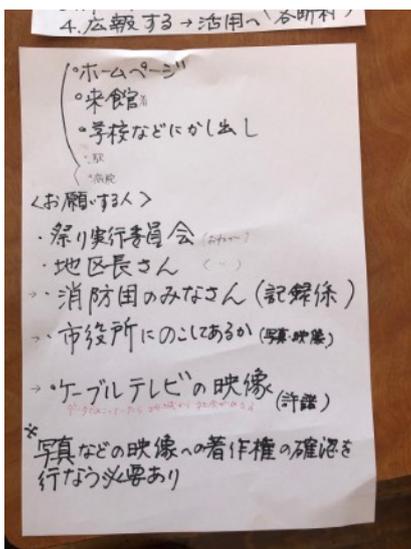
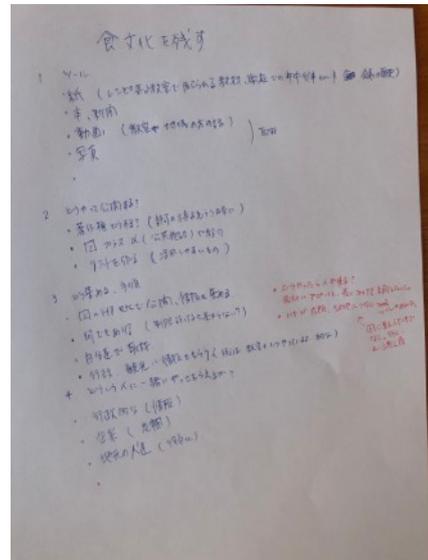
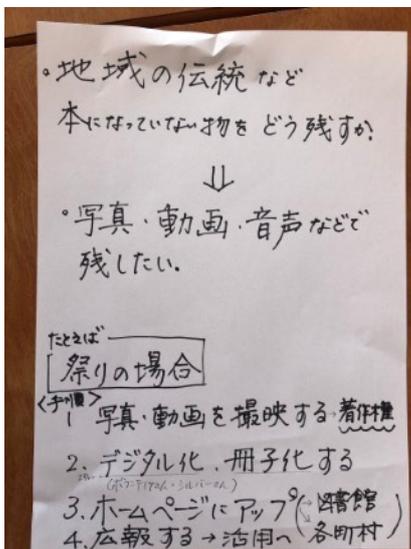
地域情報の活用をデータだけでなく、地域の人との関わりから、これからのデータ活用データ生成を考える。

「知の集積地」である図書館と地域団体との関わりを地域の側からの提案としてどのように共同していくことができるのかを考える機会とした。

はじめに、伊那市高遠で行っている図書館と地域団体との協働プロジェクト「高遠ぶらり」を中心に”いま”残すべき資料は何かを考える。平成の30年の資料は残されているのかを考えることにより、自分が生きてきた時代から残すべきもの考えるきっかけになすような話題から、資料公開までのプロセスや「ジャパンサーチ」など活用のできるポータルサイトなどを今からでも参加のできるサイトなどをおし各自にあったこれからの情報提供のあり方を考察した。

後半は、前半の内容を踏まえた上でグループに分かれワークショップを開催した。内容は、残すべき事柄を選定し、集積・公開することを考えた「公開ツールは?」「どのように公開するか」「どのようにして資料を集めるか(手順を含め考える)」「どのような人と協働したら集められるか」を実際の公開までを考えながらワークを行った。

[記録写真参照]



第13分科会 分科会テーマ「地域資料の収集、保存と有効活用

～県内全域の視点で～

世話役：柳沢磨三代 山崎まゆみ（県立長野図書）

出席者：19名

形式：ワークショップ形式（4名×1グループ、5名×3グループ）

1 分科会の目的確認

- ・地域資料を何のためにどう集めて、どう使って、どう保存して、どう利活用していくかを、みんなで一緒に考えて、知恵を出し合う分科会にしたい。

2 討議の概要

- ・グループワーク1 「何を期待してここにきましたか？ 他の参加者にきいてみたいこと」
 - 地域資料をどう集め、保存しているか他館の様子を知りたい。
 - 受け入れたい資料の情報を得る方法、レファレンスのときにどう活用しているか。
 - 子どもが活用できる地域資料の収集、保存について、どうしているか聞きたい。

↓

地域資料の形状（形態）・発行形態について全体で確認。

↓

- ・グループワーク2 「地域資料の情報源はなんですか？」
 - 足で稼ぐ（行政資料・公民館・人脈・空き家、蔵を壊すとき）
 - HP や SNS でほしい本を発信する。
 - 行政パンフレット（観光・史跡など）にルビをふってもらい、児童用に新たな資料としたい。
 - 学年で使用した、もしくは作製した資料を保存したい、出典を記録しておく。
 - 所在がわかる総合目録を整備する。

↓

- ・地域資料の保存方法について…「将来にわたって長く活用するために保存方法、提供方法を考える」ことを全体で確認。

「何をいつまで保存するか」「保存の形態を変換するか」

- ・地域資料の所在と利活用について状況を確認

「総合目録を考える」……所蔵資料をどうヒットさせるか

- ・信州ブックサーチ ・長野県内図書館横断検索 ・長野県新聞雑誌総合目録
- ・県内各広域情報ネットワーク

「各種データベースをどのように活用していくか」……原資料とは別の「活用手段」

- ・各図書館が作成したデータベース（地域新聞など）
- ・国立国会図書館レファレンスデータベース
- ・国立国会図書館デジタルアーカイブ
- ・WARAP 国立国会図書館インターネット資料収集保存事業

3 まとめ

市町村図書館と学校図書館と県立図書館、館種を越えて一緒に考えた地域資料を収集する目的や情報を、それぞれ持ち帰って仲間と共有することにより、長野県全体の地域資料がより豊かなものとなって利用者に還元できるよう、努力を続けることを確認した。

第14分科会 分科会テーマ「児童書の排架方法について考える

～一般資料との混排の実践から～

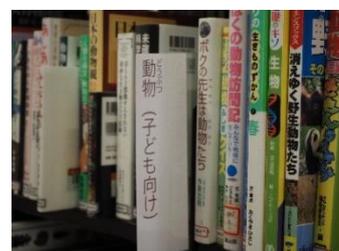
発表者：氏名（所属） 井出 明子（NPO法人本途人舎：市立小諸図書館運営一部業務受託者）
発表者：氏名（所属） 田中利恵子（NPO法人本途人舎：市立小諸図書館運営一部業務受託者）

1 発表の概要

この分科会は公募型分科会として、市立小諸図書館で実践している一般資料と児童資料を一緒に並べる混合排架について、実施に至るまでの経過と混排の内容および現状報告を行い、参加者が勤務、あるいは利用している図書館での排架方法や、児童資料の利活用の為の工夫について意見交換を行った。

1) 市立小諸図書館での混合排架について

旧市立小諸図書館（平成24年閉館）は一般室、児童室が分かれており大人と子どもの利用は完全に分断されており、排架はNDC順であった。その後新図書館建設の移行期間として設置された臨時図書館では試行として混合排架を実施し、モニターによる意見聴取を経て新図書館での実施に至った。新市立小諸図書館はワンフロア1800㎡であり、児童エリアだけでなく館内全体を子ども達や親子と一緒に利用して欲しいと願い、また必要の人に必要な資料が届きやすいように独自の排架分類と、混合排架を実施した。混排の方法としては、一般資料の後ろに見出しを付けて児童書をまとめて排架する方法と、完全に請求記号順に排架する方法をとっている。貸出状況を分析した結果、混排以前と図書回転率の低下はみられず、子どもも大人も目的に合わせて自由に利用しているようである。しかし、児童エリアから離れた場所にある資料はその利用案内に更なる工夫が必要であり、職員の案内も重用であると考えた。



見出しを付けて排架



完全に混ぜて排架

2) 意見交換

参加者を2グループに分け、自己紹介の後、各館の排架の工夫や用意した資料を例に排架方法について意見交換した。

2 討議の概要

例としてあげた『飼育員さんおしえて！ゾウのひみつ』（松橋利光/写真、池田菜津美/文、新日本出版社）では、「NDC順で排架」「時折YAコーナーで面展」「職業紹介コーナー」「写真絵本コーナーを作りそこに排架している」など各館の特徴がみられた。排架については各館とも悩みがあり、参加者の多くが「各資料をどこに排架すれば子どもたちに届けることができるのか」という点で悩むとの発言があった。その他“季節や行事ごとに排架”“出版社別”など、各々工夫をこらした児童資料の排架方法について情報交換を行った。

また、建物の階層や部屋が分かれている等、建物構造により混排は難しいという意見、分館等では混排が適しているように思えたとの意見もあった。討議中には、児童資料のみならず、絵本や読み物の排架方法についても意見が交わされた。

3 まとめ

今回、排架方法を考える事により、利用しやすい図書館運営、子ども達へ資料を手渡すという図書館員としての役割を考え直すきっかけになればとの思いで分科会を持たせていただきました。経過と現状報告にとどまってしまうのではないかとこの反省はありますが、児童図書に関わる方々との意見交換はお互いに刺激になったと思われまます。未熟ながらも発表の機会をいただいた事に感謝するとともに、公共図書館員が発表の機会を持つ事は大変意味があると実感しましたので、ぜひ多くの方に手を挙げて頂ければと思います。